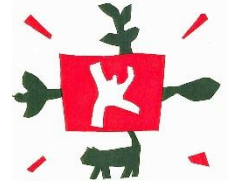


# 共同通信



2026年5月31日 356号(566号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

## To tell the story 255

説教「十字架を仰ぎ見る」

マルコによる福音書第15章33～41節

はじめに

西宮共同教会の礼拝に参加させていただくのは何年ぶりでしょうか。この度も、菅澤先生にお電話を頂戴し、礼拝で講話を語るように依頼され、お断りできませんでした。しばらく、高いところからお耳を汚しますが、お許してください。

### 1. 内村鑑三「仰瞻」

「十字架を仰ぎ見る」という題を掲げました。この題を掲げて、思い起こしますのは、明治時代から昭和初年に活動したキリスト者、内村鑑三の体験です。最初にそのエピソードをご紹介させていただきます。ご存じのように、鑑三は札幌農学校の第2期生で、新渡戸稲造と同期でした。彼は首席で卒業し、農商務省の役人として日本最初の『魚類目録』などをまとめています。キリスト者としては、第3回全国キリスト信徒親睦会(1882年＝

明治15年)に札幌教会の代表として参加し、「空の鳥と野の百合花」という題で演説をしています。しかし、その後、大きな躓きがありました。群馬県の安中教会の女性信徒、浅田タケと結婚するのですが、半年後には破局にいたります。その経緯も原因も詳しいことはわかっていません。1884年(明治17年)のことでした。そしてその年、心に傷を負ったまま、アメリカに渡るのです。

留学といっても、私費であり、あてがあったわけではありませんでした。結局、ペンシルベニア州のエルウィンという知的障害児施設で働くことになります。札幌農学校を首席で卒業した彼が、異国の地で知的障害児の世話をし、トイレ掃除までしなければならなかったのですから、彼の複雑な思いは推して知るべしです。しかし、鑑三の優秀さを認めた施設長カーリンは、全米の慈善会議などに鑑三を

連れて行き、人間関係がひろがります。そして鑑三を支えようとする人たちが現れ、彼の将来に3つの可能性が示されました。1つ目はペンシルベニア大学で医学を学ぶこと、2つ目はハーヴァード大学、3つ目はアマースト大学でした。

じつは、ちょうどこの時期、幕末に国禁を犯してアメリカに渡り、明治維新後に帰国して、同志社英学校を設立した新島襄が二度目の訪米をしていました。さきに述べました第3回全国キリスト信徒親睦会の写真では、新島襄は鑑三と並んで写っていますし、浅田タケは新島から洗礼を授けられていますから、新島は鑑三をよく知っていました。

そこで新島は自分が学んだアマースト大学を強く勧めました。それは、新島がよく知るアマースト大学の学長シーリーのもとで学び、キリスト教伝道者になる道でした。鑑三は悩んだ末、アマーストに進学します。しかし、アマーストで学びはじめてみたものの、結婚の失敗があり、知的障害児の世話をするなかで、自分の心にひそむ罪に悩む鑑三は、自分が伝道者になる資格が自分にあるのかどうか、煩悶することになります。そうした鑑三の思いを知ったシーリー学長は、あるとき、鑑三を呼び、次のように諭すのです。

内村、君は君の内ばかり見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。なぜ己に省みる事を止めて十字架の上に君の罪を贖い給いしイエスを仰ぎ瞻ない

のか。君のなす所は、小児が植木を鉢に植えてその成長を確かめんと欲して毎日その根を抜いて見るのと同然である。なぜにこれを神と日光とに委ね奉り、安心して君の成長を待たぬのか。

これは、内村がシーリー学長の言葉を聞いてから、30年後の文章です。シーリーの言葉は彼の心に深く刻まれていたのです。『余は如何にしてキリスト信徒になりし乎』に引用された日記によれば、それは1886（明20）年3月8日のことでした。そこには次のように記されています。

3月8日、わが生涯のきわめて重要な日。キリストの贖いの力がこの日ほど明確に私に明らかにされたことはなかった。それまで私を打ちのめしてきたあらゆる困難の解決は神の子の十字架にある。キリストは私のすべての負債を支払い、私を「墮落」以前の最初の人の清浄無垢へともたらすことができる。

後にキリスト教の伝道者となった鑑三は、この体験を「第2の回心」と呼び、キリストの十字架を仰ぎ見ることを仰瞻と表現しました。そして、自分のキリスト教は「十字架教」である、とまで述べています。

## 2. 自己の罪からの解放

内村鑑三の場合、「十字架を仰ぎ見る」ということは、自分の内なる罪からの解

放を意味しました。神はみ子イエス・キリストとともに自分の罪を十字架につけてくださった。それゆえ、もはや自分の罪に思い悩むことはない。イエス・キリストの十字架により、自分は罪の悩みから解き放たれたのである。彼はそう信じました。

罪の悩みから解き放たれたといっても、彼は聖人君主になったわけではありません。彼は、その後も、自分は罪人であるとの自覚をもち続け、使徒パウロの言葉（1テモ 1：15）にならって、自分のことを「罪人の頭」であると『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』の裏表紙に記しています。「罪人の頭」ではあるけれども、罪を赦された者として、もはやおのれの罪にこだわるのではなく、神への信頼を掲げて、キリストの福音を同胞に宣べ伝えることを、彼は生涯の使命としたのでした。それは、パウロがロマ書 7 章に記している信仰体験でもありました。イエス・キリストをとおして、罪の問題から解き放たれたのでした（ロマ 7：24-25）。

私たちの多くは、パウロのような、また内村鑑三のような体験をもちません。しかし、自分の罪に悩み、他人には言えない内なる醜さに打ちひしがれるとき、イエス・キリストの十字架を思い起こし、十字架を仰ぎ見ますと、それまでの自分から解き放たれます。そこに不思議な力がはたらくのだと思います。

このことを最初に体験したのは、じつはイエスの弟子達でした。イエスの十字

架を彼らがどのように受けとめたのか、少しく振り返ってみましょう。

### 3. 弟子たちの体験

彼らは、イエスの生前、イエスこそはイスラエルをローマの支配から解放してくれるメシアであると信じて、彼に付き従いました。福音書には、弟子のヤコブとヨハネが、イエスの語る神の国が実現した暁には左と右に座らせてほしい、と頼み込んだ記事が残されています（マコ 10：35 以下）。ところが、そのイエスはエルサレムで捕縛され、あろうことか、十字架に処せられてしまいます。それまでの希望を打ち砕かれた弟子たちは、イエスを見棄てました。彼らはイエスの弟子として累が及ぶことを恐れ、身を潜めるありさまでした。その彼らに、復活のイエスが現れた、と福音書は伝えています。

イエスの復活物語には、私たち現代人には信じがたい面があります。復活をどのように理解すべきか、難しい課題ですけど、少なくとも弟子たちは、十字架で息を引き取ったはずのイエスとその教えが自分たちの心になお生きている、ということを実感したのです。

ならば、彼らは十字架上のイエスの死をどのように受けとめたのでしょうか。イエスの死の意味を彼らはどのように理解したのでしょうか。このことを聖書に即して探ってみましょう。

#### 4. 旧約聖書に基づく十字架の意味

弟子たちにイエスの死の意味を理解させてくれたのは、じつは生前のイエス自身がしばしば引用し、彼ら自身も親しんでいた旧約聖書でした。新約聖書を見ますと、そのことが分かります。

その 1 は、「出エジプト」の出来事でした。イスラエルの先祖たちはエジプトの奴隷から解放される前日、小羊を屠り、その血を家の門と鴨居に塗りました。それによってエジプトにおける初子殺害の災いを免れ、エジプト脱出が実現しました。イエスの十字架の死は、時期的に、その出エジプトを祝う過越の祭と重なっていましたから、イエスが十字架で流された血は、出エジプトの際の小羊の血と重ねられ、エジプトの奴隷ならぬ、罪の奴隷から自分たちを解放してくださった「しるし」にほかならない、と受けとめました。「罪の奴隷」からの解放という表現はローマの信徒への手紙 6 章 6 節にみられます。また、キリストを「過越しの小羊」とみる言葉はコリントの信徒への第 1 の手紙 5 章 7 節をご覧ください。

その 2 は、預言者エレミヤの「新しい契約」の預言です（エレ 31 : 31-34）。エレミヤは、シナイ山において、律法に基づき神とイスラエルの民の間で結ばれた契約は破棄されてしまった、と考えました。イスラエルの民が律法を遵守しなかったがゆえです。それゆえ、神が「新しい契約」を結び、私たちの罪を赦してくださる時代が到来する、とエレミヤは預言しました。イエスの弟子たちは、イ

エスをとおしてその「新しい契約」の時代が到来した、と思わされました。シナイ契約では、雄牛が屠られ、その血が民の上に振りかけられた、と伝えられますが（出 24 : 8）、十字架上で流されたイエスの血は「新しい契約」のしるしであった、と気づかされたのです。そのことは、最後の晩餐の記事に反映されています（1 コリ 11 : 25、ルカ 22 : 20）。そして、この「新しい契約」に生かされる者たちは「神のイスラエル」（ガラ 6 : 16）、言い換えれば、一民族をこえた「新しいイスラエル」とされたのです。

その 3 は、「清めの儀礼」です。旧約聖書のモーセ律法によれば、罪を犯した会衆に罪を清めるための「供犠」を献げねければなりません（レビ 4 章）。罪を犯した者は、幕屋で（後にエルサレム神殿で）雄牛を屠って献げました。雄牛の血は祭壇の角に塗られ、そのほかの部分はずべて焼き尽くしました。それによって罪が「清められる」と信じたのです。ここに「贖い」という訳語が用いられますが、正確には罪の「贖い」でなく、「清め」です。新約聖書では、エフェソの信徒への手紙 5 章 2 節などで、キリストがご自身を「いけにえ」として献げられた、と記されていますが、キリストの死をこのような「いけにえ」と重ねたのです。

その 4 は、レビ記 16 章に定められた清めの儀礼です。大祭司は、年に一度、幕屋すなわち後の神殿の至聖所に入り、「罪の清め」を行わなければなりません

でした。新約聖書では、ヘブライ書がこの儀礼にイエスの十字架による、一回限りの「罪の清め」の雛型をみえています。この日はヨーム・ハツ・キップリームと呼ばれ（レビ 23：27）、「贖罪日」「贖いの日」と訳されますが、じつは、大祭司と民の罪による神殿の「清め」の儀礼であって、正確に言えば、「罪の贖い」ではありません。儀礼の主眼は大祭司と聖所（神殿内の至聖所と祭壇）の清めにありました。この日は陰暦で 7 月 10 日ですが、現在でもユダヤ教徒の祝祭日になっています。

その 5 は、「罪の贖い」です。イエスの死は多くの人のための「身代金」と理解されました（マコ 10：45//マタ 20：28。ほかに 1 コリ 6：20、7：23 なども参照）。この背後には、旧約聖書レビ記 25 章に伝わる「買い戻し」の律法がありました。負債がかさんで売り渡さざるをえなかった土地を近しい親族が代わって買い戻す、あるいは負債を返せず、債権者の奴隷となった者の負債のために、近しい親族が身代金を支払って、彼を奴隷から解放するという定めです（レビ 25：23 以下、47 以下）。これが「贖い」です。文語訳はこれに「贖ふ」と訳し、口語訳は「買い戻す」という訳語を充てました。ヘブライ語ではガーアルという動詞を使います。

これを「罪の赦し」と結びつけたのがイザヤ書 40～55 章でした。イザヤ書のこの部分は便宜的に第 2 イザヤと呼ばれます。バビロニア捕囚期の匿名の預言者

がこれを書き残したといわれますので、その預言者も第 2 イザヤと呼ばれます。彼はバビロニア捕囚をイスラエルの民の罪の結果と考え、その罪を「負債」とみました。そして捕囚解放は民の負債が支払われることにほかならない、と考え、ガーアル「贖う」という動詞を使いました。第 2 イザヤには、この動詞が 17 回も用いられています。そして、皆さまもよくご存じの「主の苦難の僕」の詩を残しました。この詩には「贖う」という言葉こそ用いられないものの、一人の僕の苦難により私たちの罪は赦され、平安が与えられた、と詠いあげられました。

十字架の死にいたるイエスの受難をこの主の苦難の僕と最初に結びつけたのは、ペトロでしょうか。ペトロは使徒言行録 3 章の説教で、イエスのことを「神の僕」と呼んでいます。使徒言行録 8 章には、この苦難の僕はイエス・キリストのことである、と使徒ピリポがエチオピアの宦官に説明しています（使 8：32-33）。

以上をまとめますと、弟子たちを絶望に陥れたイエスの苦難と十字架は、旧約聖書を下敷きにして、弟子たちの間に、その意味が明らかにされていった、ということです。しかも、これらがすべて「罪からの解放」と結びついていました。そのことは、生前のイエスと接することのなかったパウロにも引き継がれました。

ちなみに、皆さまのなかに、青野太潮さんの書かれた『パウロ』（岩波新書）をお読みになられた方はいらっしゃるま

しょうか。青野さんは、「贖罪」信仰をレビ記 16 章と結びつけて、パウロにおいて「贖罪信仰」は重要ではなかった、と論じていますが、「贖罪信仰」をレビ記 16 章と結びつけるのは大きな誤解です。パウロにとって「贖罪信仰」は大きな意味をもたなかった、という理解も間違っています。日本を代表する新約聖書の研究者がこのような主張を公けにされていることは、じつに残念です。

## 5. 十字架の社会性

ここまで申し上げたかったことは、いったんはイエスを見棄てた弟子たちが旧約聖書をとおして、イエスの十字架は自分たちの罪を赦し、自分たちを罪から解放する出来事であった、との理解を与えられた、ということです。そして、以後、そのような十字架理解がキリスト教会に伝えられて、今日に至っています。もっとも、21 世紀に生きる私たちは 2000 年前のイエスの十字架を見ていません。新約聖書をとおしてそれを知るのみです。では、私たちにとって、イエスの十字架を仰ぎ見るとは、どのようなことを言うのでしょうか。

まずは「イエスの十字架」ですが、それがイエスの地上の生涯の最後の出来事であったことはいまでもありません。十字架はイエスの地上の生涯の総決算でした。福音書に伝えられますように、イエスはその短い生涯の最後の数年間、貧しい人々、病などで苦しむ人々の友として歩み、「神の国」到来の福音を語り、

隣人愛を実践しました。そのイエスがユダヤ教の権力筋から敵対視され、不当な裁判の末、ローマ側に引き渡され、十字架上で処刑されたのです。

それは不条理きわまりない出来事でした。であればこそ、イエスは十字架上で「わが神、わが神、どうして私をお見棄てになったのか」と叫ばれたのです。しかし、神からの応答はなく、息を引き取られます。イエスの十字架は不条理のきわみでした。十字架を仰ぎ見るということは、一面では、その不条理性を見つめることにほかなりません。

そこから私たちの周囲に眼を向けてみますと、私たちの周囲にもまた、様々な不条理に苦しむ人たちが存在することに気づかされます。

個人的な経験になりますが、40 年前、私ども夫婦に授かった次男が、生まれて一カ月ほどで高熱に見舞われました。私はこの乳児を抱えて、深夜、救急診療に駆けつけました。髄膜炎の可能性あり、と医師から告げられ、心に覚悟をきめ、病院の待合室で待ち続けました。いつしか夜も明け、外来患者が入ってきました。偶然、歩くことのできない少年を背負った母親が私の隣に座りました。うかがいますと、小学 4 年生にもなろうかと思えるその少年は、幼児期、小児麻痺のワクチン投与によって発症したのです。当時、同様の発症事例が全国的に頻発したために、ワクチン投与前の健康検査を厳しく行うだけでなく、一回の投与量を減らして投与回数を増やすといった改善措

置がほどこされるようになり、今では、この子のようにワクチン投与によって小児麻痺を発病する子供はほとんどなくなりました、とその母親は話してくれました。私はそれを聞いて、隣で母親に背負われた強度の小児麻痺の少年と健常児として育つ私も夫婦の年上の子供との関わりを思わずにはいられませんでした。上の子が健常に育つ背景には、このようにワクチン投与によって小児麻痺に冒された子供と親の苦しみがあった、ということに気づかされたのです。

この種のことは薬害に限られません。戦争、事故、公害、病気、自然災害、等々により、なぜ自分が、なぜこの人が、と思わざるをえない災難と苦難は私たちの周囲に数限りなく起こっています。戦後日本の平和は、広島、長崎の原爆投下による被爆者は言うに及ばず、多くの犠牲のうえに築かれました。制度上の不備や経済の歪みに晒された人々、さらには様々な自然災害に直撃された人々が私たちの周囲には数多く存在します。そのため法律や制度が改善され、防災措置が施されれば、同様の犠牲者は少なくなります。私の学生時代、水俣病が大きな社会問題になりました。新日本窒素肥料という会社が化学肥料を生産する過程で出る工場排水を水俣湾に垂れ流し、そこに含まれる有機水銀が水俣の人々の身体を蝕みました。政府も気づいていながら、食糧増産のために見て見ぬふりをしたといわれます。その結果、多くの人たちが苦しみました。今でも苦しんでいる方々

がおられます。そのために、原因が究明され、工場排水に関する法律が整備されましたので、その後は、少なくとも同じような原因で苦しむ人はいなくなりました。水俣病で苦しんだ人たちがいればこそ、その後の私たちは同じ苦しみを味わわなくて済んだ、ともいえましょう。これはほんの一例です。私たちの社会は、そして私たちが生き生かされているということ自体が、じつは、そうした多くの人たちの苦難や犠牲の上に成り立っている、ということでしょう。

ワクチン投与によって小児麻痺を発症した、身体の不自由な少年との無言の出会いの体験をとおして私は、十字架とはそのような理不尽な苦難や犠牲の象徴ではないか、と思わされました。イエスの十字架のもとには、じつは無数の小さな十字架が立ち並んでいる、ということでもあります。そこから、イエスの十字架のもつ社会性に眼を開かれました。

## 6. 希望としての十字架

ところで、福音書によれば、イエスの生涯は十字架の死によって終わったのではありませんでした。死後3日目にイエスは復活した、と伝えられます。この復活という出来事を細胞レベルで説明することはできません。それはあくまでも信仰上の出来事です。そしてそれを初代教会は最も重要な出来事として伝えました。

使徒言行録のペトロの最初の説教の主題が復活でした（使 2：22 以下）。パウロも復活を最も大切なこととして、伝え

ています (1 コリ 15 : 3 以下)。私は、死後、いずれの日にか、肉体がそのままの形で再生する、といった復活信仰に立つことはできませんが、肉体が減じた後、パウロがいう「霊の体」(1 コリ 15 : 44) によみがえらせていただける、ということとは信じます。また、そのような希望に生かされていますが、今はそのことに立ち入ることは控えます。むしろ、イエスの十字架が希望のしるしでもある、ということに触れてみたいと思います。

イエスは、4 福音書を総合すれば、十字架上で発した 7 つの言葉が伝わっていますが、その 1 つが「エロイ、エロイ、サバクタニ」「わが神、わが神、どうして私をお見棄てになったのですか」でした。私のよく知る日本の新約聖書学者たちの多くは、これをイエスの絶望の叫び、絶叫である、と理解します。さきに触れた青野太潮さんは「イエスの最後の絶叫は、無力でみじめな男の絶望と悲嘆を表す絶叫以外の何物でもない」などと記しています。そうでしょうか。裁判で妥協せず、自ら十字架を負って刑に臨み、想像を絶する苦痛に耐えたイエスが「無力でみじめな男」であるなどと、どうしていえるのでしょうか。

この言葉が詩篇 22 篇冒頭の言葉であることはよく知られています。マルコ福音書には、兵士たちがイエスの「衣服を籤で分け合った」、通りがかった者たちが十字架上のイエスを見て「頭を振った」などと記されますが、これらもまた詩篇 22 篇から採られています。ですから、

「わが神、わが神」という叫びは、詩篇 22 篇を下敷きにして理解する必要があります。重要なことは、この嘆きの言葉がほかならぬ、自分を見棄てた神に向けて 2 人称文で訴えている、ということです。

それは、神がくださったゆえなき辛苦のなかで、なお神にしがみつくほかはなかった旧約聖書のヨブの嘆きと通じます。敵の攻撃にさらされ「お前の神はどこに存在するのか」などと揶揄されながら、その神に自分の苦境を必死に訴える以外にすべをもたなかった「嘆きの詩篇」の詩人たちの悲痛な言葉に連なります。そこには、神に見棄てられたかにみえる不条理な苦難を悲痛な思いで訴えるとき、神は必ずや応えてくださる、という旧約聖書の信仰者たちの確たる信仰がありました。そう信じ貫くことが、旧約聖書を残した弱小の民の間に培われた強烈な神信仰であったのです。絶望とも聞こえる言葉の奥に、絶大なる神への信仰が秘められています。「わが神、わが神、どうして私をお見棄てになったのですか」という十字架上のイエスの叫びもそうであった、と私は思います。

弟子たちはイエスを見棄てたのですが、彼らもまた、「神の国」を実現してくれると信じて、付き従って来たイエスが捕縛され、十字架に惹かれてゆくのですから、自分たちは神に見棄てられた、といった思いを抱いたのではないのでしょうか。そうであれば、「わが神、わが神」という嘆きの言葉は、弟子たちの嘆きでもあ

ったのです。この言葉が「エロい、エロイ」とアラム語で伝えられたのは、これを伝えた弟子たちの思いと重ねられたからに相違ない、と私は思うのです。

何を申し上げたいか、お解りくださったでしょうか。十字架上のイエスの絶叫「わが神、わが神、どうして私をお見棄てになったのですか」は、たしかに絶望の言葉のように響きます。しかし、その奥には希望の種が埋め込まれている、ということです。イエスの十字架を仰ぎ見るといふことは、絶望の奥に隠された希望の種に気づかされることでもあります。イエスの弟子たちは、その種が芽生える姿をイエス・キリストの復活物語として私たちに伝えてくれたのだ、と私には思えてなりません。

私たちがまた、自分の罪や弱さに打ちひしがれるとき、不条理の苦難にあえぐとき、イエスの十字架をしっかりと仰ぎ見つつ、与えられた地上の歩みを進めて行こうではありませんか。

以上で、本日の礼拝講話を終わらせていただきます。

(月本 昭男)



白詰草

## 今月の畑だより

そこそこ味わうことになったイチゴ、かなり痛んだものもあったりして、もう終わりと思っていた、そのイチゴ。だったのですが、緑の葉っぱは、とても元気で…、とっていると、つるを伸ばして（ランナーではない！）、花が咲き始めて、そこそこの時に負けないイチゴが赤くなり始めていたのです。で、5月24日（日）の教会学校は、活動の「工作」の予定を変更し、イチゴ摘みとなりました。

畑では、5月18日（月）～22日（金）まで5日間お預かりした「トライやるウィーク」の中学生たちが、一番バッターで、ジャガイモ掘りをしました。24日（日）の教会学校でも、参加した子どもたちが、1人1株ずつのジャガイモを掘り、お土産にもなりました。今年のジャイモは、なかなかのできなのです。

ぼちぼち、サツマイモの苗を植える時期なのですが、今年のサツマイモはジャガイモを掘った後に、植えることとなります。

月に1回、園芸サークルは、淡路島の洲本市安乎町平安浦の平安荘キャンプ場に遠征をしていますが、5月は22日（金）が、その日でした。遠征には、やはり「トライやるウィーク」の中学生たちも加わり、約900本（個）の玉ねぎを掘りました。地元、淡路の苗で、無農薬・有

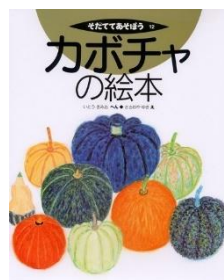
機栽培の玉ねぎは、なかなかの出来栄でした。

一方、4月に植えたカボチャの苗は、「ウリハムシ」（\*1）にやられて、せっかく丈夫に仕上がった竹のアーチに、果たしてぶら下がってもらえるか不安です。

ところで、去年は「うどんこ病」（\*2）にやられた伏原町の畑のカボチャですが、現在のところ、藤原節子さんが作って下さった苗が、元気につるを伸ばしています。うどんこ病対策は、「カボチャの絵本」（編：伊藤喜三男、画：ささめや ゆき／農山漁村文化協会、1999年）や、阪神農業改良普及センターの藤本一樹さんなどのアドバイスを得たりして、八方手を尽くして、対策を研究中です。

（\*1）ウリハムシ…ウリ科の作物に深刻な被害を与える虫。4月～10月にかけて発生し、葉や果実を食害することで、生育を妨げたり、収穫量を減少を引き起こしたりする害虫。

（\*2）うどんこ病…糸状の菌で、植物の葉や茎、つるやつぼみなど、あらゆる部位に発症し、5mm くらいの小さな点から、次第に白く広がって繁殖します。そのまま放置すると、植物は、黄変したり、縮れたりして最終的に枯れてしまいます。



晴水のち 福ちゃん さちお画

「図書館記念日」に



田川建三さん

惜別

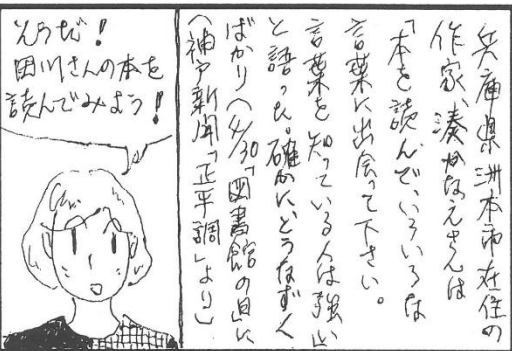


孤高の学究

2025年2月19日死去/気管支肺炎 // 89歳  
(2026年4月21日 朝日新聞(夕刊)~)



私は、この記事に触れるまぶ、田川さんのことをよく知るつもり。



えんぴ! 田川さんの本を読んでみよう!

兵庫東洲本所在住の作家 湊かほえさんは「本を読んだ、いろいろは言葉に出会って下さい。言葉も知っている人は強いと語った。確かどうはよくばかり(4/30「図書館の日」(補)新聞「正平調」より)

晴水のち 福ちゃん さちお画

「丸かじり」本の作者、逝く



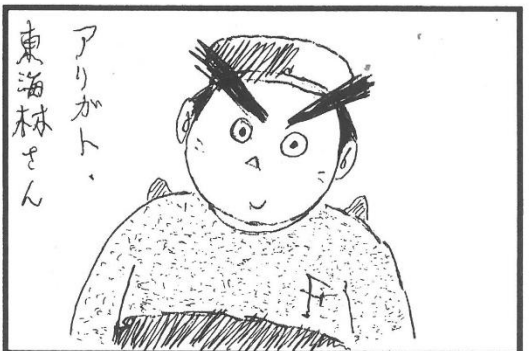
懐かしき戦海蒼井

2026年4月5日死去/心不全 // 88歳  
(2026年4月15日 朝日新聞(夕刊)~)  
サリマンの日常を描いた漫画家



東海林さだおさん

= 2011年



アリカト、東海林さん

# あんなこと こんなこと

2026年4月23日(木)～

## 津門川のこいのぼり

今年も、子どもたちと描いた「こいのぼり」が、津門川を元気いっぱい泳ぎました。風にそよぐ姿は、とても気持ちよさそうで、川沿いを歩く人たちの目も、楽しませてくれています。



2026年4月29日(水、祝)

## みんなでカレーパーティ

### 丹波篠山市後川 旧後川小学校

久しぶりにみんなで訪れた後川は、春の緑がいっぱいで、吹く風も気持ちよく、とてもいい時間を過ごすことが出来ました。みんなで手作りのカレーライスをいただき、山の中の散策をしたり、足元を歩くカニを追いかけたり、お茶の新芽を摘むことも出来ました。自然の中で、それぞれが春をたっぷり味わう1日となりました。



2026年5月10日(日)

### 津門川川掃除

5月の川掃除は、23人の人たちが集まりました。暑い中でしたが、阪急電車のあたりから、171 合織付近まで、みんなで川の掃除をしました。川の中でごみを拾う人、上からごみを受け取る人、それぞれが粹割を持って動き、子どもたちも楽しそうに、お父さんたちから渡されたごみを受け取ってまとめ、橋のたもとへ運んでくれました。みんなで力を合わせてきれいにした川は、私たちにとって大切な川です。



2026年5月18日(月)～22日(金)

### トライやるウィーク

深津中学校より2名、瓦木中学校より2名の中学2年生の子どもたちを、5日間お預かりしました。はじめは、慣れない場所に少し緊張した様子や、不安そうな表情もみられましたが、日を重ねるごとに少しずつ笑顔も増え、西宮公会堂での活動にも自然と馴染んでいってくれました。伏原町の畑でのじゃがいも掘り、電動糸のこを使ったパズルづくり、積み木あそび、そして、最終日には、淡路島での300個を超えるたまねぎの収穫のお手伝いまで、さまざまな活動と一緒に楽しむことができました。子どもたちがそれぞれ、一生懸命に関わり、笑い、過ごしてくれた5日間は、私たちにとっても、とても楽しく大切な時間となりました。



## これからの学校を考えるために

### —日本の教育史をふりかえる

文部科学省の調査によれば、小中学生の不登校児童生徒数は 35 万人を超えたという。多くの人にとって、この数字は衝撃的に映ったはずだ。しかし同時に、これは決して突発的な異常事態ではなく、長年積み重ねられてきた学校制度の帰結と考えることもできる。

昨年 11 月号でも述べたが、不登校は子どもの側の「問題」ではない。それは、子どもと学校制度とのあいだに生じた深刻なミスマッチの表れであり、制度そのものの問い直しを私たちに突きつけている。そこで今回は、これからの学校のあり方を考えるために、日本における「学校」という制度が、どのような背景のもとで成立し、どのように変化してきたのかを、時代を追って振り返ってみたい。

(150 年を 3000 字で振り返るという、やや乱暴な試みである。わかりづらい部分があることを、あらかじめお許しいただきたい)

## 明治学制

### —学校が「制度」として誕生

日本における近代的な学校制度は、1872 (明治 5) 年の「学制」公布によって始まる。それまでの寺子屋や藩校は、身分や地域に応じた限定的な学びの場であったが、学制は初めて「すべての国民が学校に通う」ことを原則として掲げた (寺子屋がいかに優れていたかについて

は、あらためて述べたい)。

明治の学校教育の最大の目的は、「近代国家を支える人材の育成」「西洋列強に対抗できる国力の形成」である。読み書き計算、規律、勤勉さ、忠誠心。学校は、国民国家の基礎を形づくる制度として、急速に整備されていった。ここで重要なのは、学校が個人のためというより、明確に「国家のための装置」として構想されていた点である。

「果ては博士か大臣か」という言葉に象徴されるように、身分によって将来が決まる社会から、学べば道が開ける社会への転換は、大きな進歩でもあった。しかし、授業料の問題、労働力として必要とされる子ども、女子教育の軽視などにより、就学率は当初かなり低迷した。「理念としての平等」と「現実の格差」の乖離は、制度の出発点から存在していた。

また学校は、「同年齢」「一斉授業」「同一進度」といった、子どもの多様性を前提としない画一的な仕組みを生み出した。さらに試験によって「できる／できない」「上／下」が可視化される。学校は「学ぶ場」というより、「ふるいにかける場」として機能し始めていた。明治の学校を見ていると、国家の都合、社会の要請、経済効率が優先され、「子どもがどう学びたいか」「どう育つか」は後回しにされていたことがよく分かる。この構造は、形を変えながら、現代の不登校問題にも直結している。

## 澤柳政太郎と大正自由教育

### —子ども中心への転回

こうした明治の学校に疑問を抱く官僚や教師が現れる。その中心人物の一人が、澤柳政太郎である。澤柳は文部官僚として制度の中核にしながら、学校制度を内側から相対化し、批判した近代学校批判の最初期の実践者であった。しかも彼は批判にとどまらず、自らの思想を実践する場として成城小学校（現在の成城学園）を創設する。

澤柳政太郎の教育思想の核心は、「個性尊重」と「子ども中心」にある。彼は明治以来の学校教育を次のように批判した。「学校が教えることを中心にして、子どもをそこに合わせようとしている。本来は、子どもに応じて教育が組み立てられるべきだ」。これは当時としては、きわめてラディカルな考え方であった。

大正期に入ると、都市化と中産階級の拡大を背景に、「大正自由教育」と呼ばれる新しい教育思想が広がる。子どもの自発性や個性、生活経験を重視し、画一的な詰め込み教育を批判する動きである。しかしこの流れは、主として私学や一部の先進的实践にとどまり、全国的な制度改革には至らなかった。

## 戦争への突入

### —学校が再び統制の装置となる

昭和に入り、日本が戦争へと突き進む中で、学校は再び国家統制の色を強めていく。修身教育、集団行動、命令への服従。教育の目的は明確に「国家に役立つ

人材の育成」へと収斂していった。大正期に芽生えた個性や自由を重んじる教育は、「軟弱」「非国民的」として排除され、学校は再び統制と管理の場へと戻っていく。この時代、学校は子どもを育てる場というより、国家の方針を浸透させる場所として機能していた。

## 戦後教育

### —新しいスタート

敗戦後、日本の教育は大きな転換点を迎える。軍国主義教育への反省と、GHQ 主導の民主化政策のもと、学校は理念上、「民主主義社会を支える個人」を育てる場として再構築された。この時期に導入されたのが、「経験主義」と呼ばれる教育観である。子どもの生活経験や興味・関心を出発点に学びを構成し、問題解決学習や生活単元学習を重視する考え方で、アメリカの教育思想家ジョン・デューイの影響を強く受けていた。理念としては、大正自由教育と近いものであった。

しかし現場では、「どこまで教えればよいのか」「学力は本当に保障されるのか」という不安が広がる。教師の裁量が増えた一方で、それを支える準備や経験が不足していたこともあり、学校現場は次第に混乱を深めていく。

## スパートニク・ショック

### —経験主義から系統主義へ

米ソ冷戦の中、アメリカとソ連は宇宙開発で競う。そんな中、1957年、ソ連

が人工衛星スポーツニクの打ち上げに成功する。これは大変衝撃的な出来事であり、「学力危機」への不安を引き起こした。日本でも、理数教育や基礎学力の強化が叫ばれ、教育政策は大きく方向転換する。学習指導要領は内容を増し、教育理念は「経験主義」から「系統主義」へと移行する。教科ごとの学問的体系を重視し、知識や技能を段階的に積み上げることが重視された。授業は再び教師主導、教科書中心となり、学校ははっきりと学力競争と選抜の場としての性格を強めていく。こうして日本の学校は、戦後の自由化から、再び明治以来の管理型モデルへと回帰していくことになる。

## 高度経済成長と受験競争

### —学校が人生を左右する装置になる

1960年代以降の高度経済成長期には、学歴が就職、収入、社会的地位に直結するようになる。大学進学率は上昇し、偏差値による序列化が進み、「受験戦争」という言葉が日常的に使われるようになった。学校は「学ぶ場」である以上に、「将来を決定づける関門」となり、子どもたちに強い緊張とプレッシャーを与えるようになる。競争についていけない子ども、学校の画一的なリズムに適応しにくい子どもは、次第に周縁化されていった。

## 校内暴力

### —制度への可視化された抵抗

1970～80年代に社会問題化した校内

暴力は、単なる「荒れ」や規範意識の低下ではない。強まる管理、激化する学歴競争に対して、子どもたちが示した可視的な抵抗の一形態であったと捉えることもできる。一方で、この校内暴力は、やがて収束していく。その背景には、学校側による管理・指導のさらなる強化、警察や家庭との連携の強化、さらには「問題行動」を起こす子どもを学校内部から切り分ける対応が進んだことがある。秩序は回復した。しかし、それは根本的な問題の解決を意味してはいなかった。

## 暴力から沈黙へ

### —不登校という形の変化

校内暴力が減少すると入れ替わるように、不登校の児童生徒が徐々に増えていく。かつてのように学校の枠組みに正面から反抗するのではなく、「参加しない」「距離を取る」という、より静かな形での意思表示が広がっていったのである。

## ゆとり教育と脱ゆとり教育

### —繰り返される振り子運動

1990年代には、こうした競争と管理への反省から、「ゆとり教育」が導入される。授業時数や内容を削減し、「生きる力」や主体性を重視する試みであった。しかし、学力低下への不安や国際学力調査の結果を背景に、「脱ゆとり」へと再び舵が切られる。内容は増え、評価は細分化され、学校は再び緊張を取り戻していく。

「自由にすれば不安になる。管理を強めれば息苦しくなる」。この振り子運動は、戦後一貫して繰り返されてきたものであり、新しい現象ではない。

### 同じことを百五十年繰り返している

こうして振り返ると、日本の学校は150年にわたり、基本構造をほとんど変えることなく、理念だけを入れ替えながら運営されてきたことが分かる。具体的には、次のような点が、明治以来ほとんど変わっていない。

- ・ 同年齢集団を前提とした一斉編成
- ・ 同一進度、同一内容で進む授業形態
- ・ 学びより評価と序列化が中心に据えられていること

それは、150年前に建てた家を、間取りはそのままに、内装だけを何度も直して住み続けているようなものだ。社会は変わった。子どもの育ちも、価値観も、学びの環境も大きく変化している。それにもかかわらず、学校の基本設計は今なお近代国家成立期のままである。

現在、2030年の学習指導要領の改訂に向けて審議が進んでいる。求められているのは、対症療法的な改革ではない。築150年の建物本体をスクラップし、新たな建造物を建てる覚悟である。

不登校35万人という現実を、その時期がすでに来ていることを、静かに、しかし確実に示している。

(石田 航平)



スイートピー

## 福島東電の事故 そこから考える

原発事故は未必の故意の犯罪  
～石丸小四郎さんの話から②

石丸さんは郵便局に勤める労働者です。労働組合の全通に所属していました。原発反対運動を支えた人たちの中心に労働組合がありました。そのうちの一つが全通でした。全国どこにも郵便局、学校、役場があります。全通、教職員組合、自治労の組合員は津々浦々にいたものです。

石丸さんの話は、2012年6月30日いわき市での「第一回 震災と放射能汚染後をどう生きるのか ふくしまフォーラム」、原水禁広島大会での講演をもとにしています。

石丸さんの話の続きです。

原発労働は二重三重の構造になっています。ピラミッドの上に東電の社員が存在します。40歳になれば年収1000万円です。しかし下請け労働者は社会保険さえ未加入の人が普通にいました。無権限な状態に置かれた労働者に原発は支えられていたのです。

私が強調したいのは、この多重構造の不条理、理不尽の中に企業舎弟が深く介在しているのです。企業舎弟とは暴力団につながるものです。原発労働は、危険・きつい・汚いの3Kの職場です。日本では古来からこの3Kというのは暴力団に依存してきたという歴史があります。

そして東電は科学の粋を集めた原子力

発電所という主張をしていますが、実際には本当に古典的な這いつくばるような除染作業で初めて成り立つのです。これがなければ、原発は一日たりとも動かないのです。

そして原発事故以降、それが一層進化しています。矛盾が数十倍、数百倍に広がっています

そしてこの原発の放射線収束作業の労働は、この企業舎弟がますます介在し、そして力を発揮し、そして力を発揮し、労働者を阻害する、大変危険な状況に立ち至っていると認識しています。

このまま、労働者の無権利状態、使い捨て状態がそのままだと、収束作業自体を放棄することになるのではないかと心配しています。

原発で働いている下請け労働者の権利を守ることが、実は皆さんの安全にとって必要不可欠なものなのです。

今まで本当に被曝労働には、光が当たりませんでした。そしていかに多くの人たちが、使い捨てにされ、泣き寝入りしてきたのか。そのことを忘れてはいけなはずです。

### 犯罪的な労働

なぜ原発労働者が被曝労働を強いられているのか。原発は「未必の、故意の犯罪」なのです。このまま被曝労働を続けさせることは、確実に死に至るわけです。そういうことを想定しながら働き続けさせるというのは犯罪です。

大切なことは、この労働をやめさせる

ことではなく、働いている人たちの身分を、権利を守ることです。そして将来の健康を保障することです。

福島県は放射線管理区域にあります

いわき市の被曝線量は、2011年3月15日前後に毎時72マイクロシーベルトと急激に増加します。実はこのとき、断水していました。多くの人たちが給水を受けるために外にいました。子どもたちも大人と一緒に並んでいました。

そこにセシウム134、137、いわき市の場合は、ヨウ素131が降り注いだのです。このプルームは、南下して茨城県、千葉県、首都圏に到達しています。この頃、県土の約3分の2はが放射線管理区域なのです。毎時0.6マイクロシーベルト、1平方メートル当たり4万ベクレル以上が放射線管理区域です。18歳未満は立ち入り禁止。飲食はできない。うんこもおしっこもできない。そういうところに県民は暮らしていたのです。

日本国民は、アメリカの核の傘で守られなければならないとあって、70年間、沖縄に米軍基地の75%を押し付け、放置しています。移転することもなく打ち捨ててきた国民です。

外国人に言わせると「日本はクレイジー」なのです。広島、長崎で核の惨禍を仕ったはずです。ビキニ環礁、JCO臨界事故、そして福島原発事故。そして原発を再稼働させています。

あるジャーナリストがこう言いました。「日本で原発を動かすというのは、アフ

リカの地雷原でカーニバルをやっているようなものだ」。まさにその通りだと思います。

私たちは、この現状、被曝労働者の収束作業を注意深く、高い関心を持ってみていきたいと思います。

石丸さんは、福島原発が完成する前から原発に反対してきた人です。いわき市議の佐藤和良さん、大熊町議の木幡ますみさんもそうです。皆さんは事故前から東電に原発の運転状況の報告を受けるために定期的に面談を繰り返していました。福島県民は、原発は安心ととらえていたわけではありません。

原発は地元民に雇用をもたらしたとされています。そこに生まれたのは、東電社員を頂点としたピラミッドだったので。

事故前、木幡さんは学習塾を経営していました。子どもたちは、東電に就職することが地元に残る目標だったと言います。子どもたち、その父兄をつうじていろいろな地域の情報が入ってきます。

東電で下請け労働者として長い間、働いていた近所に住む方がガンで亡くなりました。その葬儀に東電社員が弔問に訪れました。香典の袋には50万円入っていたそうです。

もちろんガンと原発由来の放射能との因果関係は証明できません。木幡さんは、地域の中に東電で働いていた人たちがいる。何人もがガンでなくなったと言います。地元の人には分かっているのです。

原発で働いていたからガンになったのだ  
と。 (しかたさとし)

(四方 哲)

※ロシナンテ社では、福島は今、原発問題につ  
いて、PDF 版「ロシナンテ通信」をインター  
ネット配信しています。

年間購読代 3600 円 お申込みをよろしくお  
願いたします。shikatasatoshi@gmail.com



カーネーション

～♪ぼくのみる空と きみのみる空は  
つながっているから～

名護七曲（156）  
「オール5」

途方に暮れ、真美のラーガに包まれた魂が宇宙の根本原理に到達しようかというその時、ふと今週中に決算をしないといけないことを思い出し、慌てて現実に戻ってまいりましたのが先月、4月の第1週。その後、教会総会も無事に終えまして、名護伝道所も新しい会計年度がスタートいたしました。感謝であります▼さて5月に入り、雨も降りだしまして沖縄島地方もいよいよ恵みの梅雨。この辺りでは「すーまんぼーすー」とも言うそうなのですが、実際は小満よりも数週間前（だいたいゴールデンウィークぐらいからかな？）から、芒種よりもずっと後（沖縄慰霊の日ぐらいまでかな？）にかけて前線の影響を受けやすい状況が続きます。洗濯物が乾きにくかったり、コピー用紙がヨレヨレになったり、たいへん鬱陶しい季節ではあるのですが、わたしは別に雨降りは嫌いではないので、降るべき時にしっかり降ってもらいたいなと願っています▼職場の窓からも雨の日の色んな自然の表情を観察することができます。爽やかなうりずんの風に芽吹いた草木の緑が、潤いを得て更にグングン元気に育つ様子や、雨の中を急ぎ足で飛んで行く鳥たち、濡れた葉っぱに身を寄せゴソゴソ蠢く、なんかしらんけど虫。

風のアーラップ、トタンを打つ雨のジョール、流れゆく雲、雷鳴と一瞬の光、... ああ、何という美しい旋律▼大自然の詠唱に心を奪われ、つい悟りを開きそうになってしまいました、その前にしないといけない仕事が沢山あります。溜まっている仕事を一つ一つ片付けていかなければなりません。まずは、やらないといけない事のリストアップと期日の確認。それらを優先度・重要度順に分けて効率良くお仕事を進めてまいりたいと思います▼（1時間45分後）とりあえず比較的締め切りの近いタスクについて、それぞれ重要度を5段階にわけて評価してみました。結果としましては全部5。（レベル5は期日切迫且つ最重要） なんだかあまり意味がなかったような▼分けるって意外と難しい。どの仕事も大事だし、締め切り近いし、そうこうしているうちに日曜日は必ずやって来るし、この原稿も早く書いて送らないとだし、お掃除、洗濯、議事録、買い物、銀行...何からやればってテンパっていると、ある瞬間、天から例のラーガが降りてきます。ド・シ・ラ♭・ソ・ファ#・ミ・レ♭・ド～ですね。で、そのまましばらく宇宙と一体化（笑）。当たり前だけど、あれって気が付いた時、結局何一つ片付いてなくて、毎回ああ～☹ってなる。

（羽柴 禎）

# つとかわ・あれこれ

2025年度の西宮公同教会は、新しい事務局体制で、「地域共同・共生支援活動事業」を、その働き・活動の具体化に取り組んできました。ただ、それらは「新たに」ということですから、その一年目は「試行」ということで、少しかつはるか先を目指しての歩みであることを大切にしてきました。

教会は、関西神学塾と共同で「学習の機会を作る中、中でも福嶋 揚さんを迎えてのハンス・キュンクの「イエス」の学習を通して、規則の中に、2名の「役員補」及び「使徒伝道者」の項を設けることになりました。恐らく、これらの働きが、「少しかつはるか先を目指しての歩み」が実を結んで行くように思われます。

この「少しかつはるか先を目指しての歩み」で、もう一つ実現することになったのが、西宮公同教会のホームページの更新です。その冒頭は以下のようになっています。

人間は生きものであり、  
自然の一部である (中村桂子)

傾ける耳、涙する目、  
差し伸べる手 (浜 矩子)

イエス・キリストのあとに従いながら、ひとは今日の世界で、真に人間らしく生きて、行動して、苦しんで、死んでいくことが出来る。幸せな時も、不幸な時も、生きる時も、死ぬ時も、神に抱かれて、人々をおおいに助けながら。  
(ハンス・キュンク)

こうして示される、大きくは3つの項目は、西宮公同教会及びその関係する働きの中から生まれ、具体的に組み込まれてきた事の現時点でのまとめの表現であり、すべては具体的な働きが、その背後にあって積み重ねられてきています。

そうした「背景」があってはじめて、地域共同・共生支援活動事業の、具体的な事業項目を示すことも可能になっています。

もちろん、それらを示すに到る歩みも、それらの歩みそのものも、容易い事ではありませんが、少しずつ、そして・・・に興味を持って参加する人たちを加えながら、歩みを重ねてきているように思えます。

それが「まち食堂」であったり「園芸サークル」であったり、「こうどうぶんこ」であったり、「教会学校」であったりするし、それらの働きの一つ一つを実現する場合の根拠が前掲のホームページの冒頭

のページに示されています。

そして、こうした働きのもう一つとして始まるようとしているのが、「アートガレージ」の活用です。アートガレージは、西宮公同教会の収益事業の意味・意義を問いかつ問われる「場所」として、本来はとても重要な場所であり、そのあり方、存在が問われてきていました。

その課題を、いかに担うのかを、少し形を変えて実現することになるのが、発足することになった、アートガレージ運営委員会です。発足することとはなったものの、新しい試みですから、委員会も当面は右往左往しながらの歩みということにならざるを得ないはずです。

ただ、現に、アートガレージという表示と、いくつかの働きが表示された場所ではあるのですから、とにかくその日常を大切にすることが、すべての始まりになるように思われます。

今は、その存在が、取り囲む街の欠くことのできない一つの場所として、一つでも多く、一人でも多くの人たちに共有されることを願って、「大きな扉」を開けることでその一歩を刻めたらと願っています。

こうした働きを、「少しかつはるか先を目指しての歩み」としてきた西宮公同教会ですが、少し補足するとすればよりも大切にしてきたのが、「今を生きる子どもたち」です。それは休園中の西宮公同幼稚園の歩みであったり、そして、変ることなく活性的な集まりを実現してきた教会学校です。それが、実現してきた「原動力」が何かあるとすれば、「自由」な「居場所」であり続けてきた事のように思えます。そうして、子どもたちが「そこに居て」「居た」子どもたちが「残る」ことに対する応答として実現することになったのが、「放課後教会学校」です。もし、そこが「自由」な「居場所」であるとすれば、言わば、自然発生的に始まったことにこそ、その存在理由がありますから、誰かの何かの意図ではなく「自由」な「居場所」である以上でも以下でもないのが放課後教会学校です。

そして、それを実現する原動力となっているのが、子どもたちの「自由」な「居場所」を共有するスタッフの存在です。

「休園」となっている西宮公同幼稚園については、それを継続し、今年度もその再開をさぐることになります。

(K)

我が家の庭は、今、本当に木々の緑が美しく、ヤマボウシの緑に埋もれた葉っぱの間から、白い花がやっと立ち上がって見えてきたり、カシの木も日毎に古い葉を落とし、若葉と入れ替わって、薄緑の葉が目立つようになってきている。柿の木も伸びすぎるほどに若枝が伸び、紫陽花も細やかな蕾をつけ始めている。

つい先日、収穫したような気がするブルーベリーも、とっくに花は終わって、たくさんの実をつけている。ゆずは、花を咲かせ始め、小さな実をつけている枝も見つけることができる。また、クリスマス・ホーリーのまぶしく陽に輝く、つやつやした葉の影にまん丸の実がたくさん付いているのも見える。ミモザも、ぐんぐん伸びて、お隣の敷地にまで枝を伸ばし、迷惑がられていそうだし、生垣のレッド・ロビンも、赤い葉を繁って、背が高くなり、立派に目隠しの役目も果たしている。

この庭の繁り具合のそれもこれも、いつもお願いしている庭師さんが、病気やら、骨折やら、旅行やらで、春先にすべき仕事が間に合わなかったせいであると私は思っている。人の庭を放っておいて、楽しい旅行の写真をアップするのもどうかと思うが、お隣の家の木と合わさってうっそうとした緑は、本当にずっと見ていたいほどに心を和ませてくれる素敵な光景でもあります。

(S)

4月から始まった「放課後・教会学校」。

教会学校の時間が終わって、お昼までに帰る子どもいれば、一緒にお昼ご飯を食べて過ごす子どもたちもいます。

お昼には、山地くんが、みんなのためにたくさんの味噌汁を作ってくれて、子どもたちは持ってきたおにぎりと一緒にいただきます。

その光景は、まるで小さな家族のようで、とても心が和みます。

広い幼稚園の中には、園庭があり、ぶんこの部屋があり、1階の部屋、そして2階の大きな部屋には卓球台も出しています。子どもたちは、それぞれ好きな場所で、自由に、思い思いの時間を過ごしています。

そばには、信頼できる大人たちがいて、年齢の違う子どもたちが、それぞれの居場所として、この場所を楽しんでいます。子どもたちの色々な違いを急いで揃えようとしなくていいことを大切にしながら、こうした時間が、これからも穏やかに守られ、子どもたちにとって安心して帰ってこられる場所であり続けますように。

(K)



カキツバタ

